

第4回「子母澤寛文学賞」「愛猿記賞」の選評

選考委員長 佐藤勝彦

第4回「子母澤寛文学賞」（短編小説部門）、並びに「愛猿記賞」（エッセイ部門）は、令和5年（2023年）7月から令和6年（2024年）3月にかけて募集し、全国から多くの応募をいただきました。心より御礼を申し上げます。

今回は、短編小説部門で73作品、エッセイ部門で60作品、合計133作品の応募がありました。

男女比では、短編小説部門が男性73%、女性が27%で、今回も前回と同様、男性の応募が多くありました。エッセイ部門では、男性が72%、女性が28%と、こちらも男性の応募が多い結果となりました。

応募者の年齢構成を見ますと、短編小説部門が18歳～80歳で、その平均は59歳で、エッセイ部門では24歳～92歳で、その平均は61歳です。両部門とも幅広い年齢層からの応募が全国各地域から寄せられました。

応募作品の選考方法は次のように行われました。

まず実行委員会により、5月上旬から7月下旬までおよそ3か月をかけて下読みを実施し、全ての応募作品を一つ一つ丁寧に読み込みました。

下読みでは、選考委員会へ推薦する際の視点として、次の4点について留意しました。

①「子母澤寛文学賞」「愛猿記賞」の趣旨であるヒューマニズムに溢れる

作品であるかどうか。

②明るい読後感があり、未来への期待が持てるほどのぼのとした作品であるかどうか。

③小説は文章構成やストーリーの展開が巧みであり、登場人物の性格設定を際立たせる人物描写や自然描写等に工夫がみられ、登場人物を生き生きと魅力的に描いているかどうか。

④最後まで一気に読ませる面白さがあり、多くの人たちに読んでもらいたいと感じさせる作品であるかどうか。

これらの4点を考慮しながら下読みを進めました。

下読みが終了した時点で、慎重な議論を重ね、合議の結果、今回は短編小説部門から5作品、エッセイ部門から6作品を、それぞれ推薦作品として選出し、選考委員会へ提出しました。

推薦作品は以下の通りです。

【短編小説部門】

「ヒロシマの少年」「割り箸の向こう」「花燃香」「千鳥病院三階コスモス病棟」「壬生の風」、以上5作品（受付順）

【エッセイ部門】

「紺帽子いっせいに」「知らないお話」「豆まき」「父の新撰組始末記」「思想より強きもの」「侍」、以上6作品（受付順）

選考委員会において、上記の推薦作品について厳正なる審査を行い、かつ慎重に検討した結果、次の通り、受賞作品が決定しました。

短編小説部門では、出雲遙氏の「壬生の風」が大賞に選ばれ、松原凜氏

の「千鳥病院三階コスモス病棟」が佳作に決まりました。

エッセイ部門では、近藤ゆみ子氏の「侍」が大賞に選ばれ、平野由希子氏の「豆まき」と小野みふ氏の「紺帽子いっせいに」が佳作に決まりました。

今回の入賞者の特徴として、小説部門は入賞者が男性と女性でしたが、エッセイ部門では、入賞者全員が女性でした。参考までに、前回は受賞者全員が男性でした。

【短編小説部門の選評】

「子母澤寛文学賞」大賞 いづも はるか みぶ かぜ
出雲 遙 「壬生の風」

「壬生の風」は、3・11 東日本大震災の発災後、宮城県気仙沼市へ災害支援のために派遣された京都府警職員たちの物語である。2人のベテランの警部補と18人の若い職員たちの任務は、遺体安置所での遺族支援という過酷なものであった。

本作品の舞台となった遺体安置所。そこは、地震と津波で行方不明となった親族の安否情報を必死に求める人々や、遺体と対面して慟哭する遺族たち、そして、「どこかで生きているのでは」と一縷の希望を抱く人々など、深刻で複雑な思いが交錯する場所だった。

そのような厳しい場所で、京都府警の職員は、任務終了まで、訪れた被災者に対して心を尽くして支援し、寄り添うことを固く決意する。

近年、自然災害が未曾有の被害の爪痕を各地に残し、被災地の悲惨な状況がメディアで報じられている。そして、災害地に派遣される自衛隊や官庁公務員等の派遣要請が増え続ける一方で、その復興が思うように進んでいない現

状がメディアによって伝えられ、被災地支援の在り方が大きな問題となっている。

本作品では、京都府警が災害支援として派遣した警察職員が、かつて新選組が屯所とした壬生寺の一角を管轄する中京警察署員であったことから、作品の登場人物を新選組の主要な隊士になぞらえて描いている。

選考委員からは、「登場人物の渾名を、新選組隊士の名に擬したのは、子母澤寛の作品からアイデアを取ったのかと思ったが、重苦しい内容に、それが一寸コミカルな要素となっており、読みやすい小説となっている」と評価された。

人間味あふれる本作品は、3.11の自然災害の怖ろしさを伝えるだけでなく、日本列島のどこでも起こり得ることを警告し、自分たちの問題として考えるべきであることを示している。ぜひ、多くの人に読んでいただきたい。

「子母澤寛文学賞」佳作 まつばら りん ちどり 松原 凜 「千鳥 病院三階コスモス びょうどう 病棟」

松原氏の作品は、看護師2年目の主人公が3階の終末期患者の入院病棟（通称『コスモス病棟』）へ配属され、病気へ立ち向かう患者と明るく人間味あふれる関係を築いていく心温まる作品である。

最初は、排泄のたびにベッドが便まみれになる患者がいる病棟は、清潔と腐敗を閉じ込めたような匂いで息がつまる思いであった主人公が、患者の日常と深く関わるうちに、「排泄物や、ご飯の食べ残し、飲み込めず吐き出したもの。それらは決してきれいでもいい匂いでもないけれど、ここにいる人たちが、毎日、食べて、寝て、排泄しながら、残された時間を懸命に生きている匂いだった」ことに気づきはじめる。

その気づきは、「人の便を見て喜べる職場は、どこにでもあるものじゃない。人の生活に深く関わっているから、人の体の些細な変化に悩んだり喜んだりできるのだ。臭くても、汚くても、人に嫌な顔をされても、私はこの瞬間のために働いている。茶色の染みがついたおむつは、やっぱり臭くて、私はおむつを取り替えながら一人、また笑った。」という明るく前向きな姿勢の中にあり、プロの看護師としての成長の証しとも読み取れる。

患者の臨終に立ち会い、「……全然来れなくてごめんな。もっといっぱい顔見とけばよかったなあ……」と皆、口を揃えて言う。終末期病棟で、「もうすぐ死ぬことがわかっているからここにいるのに、現実から目を背けてきた結果なのに。」と主人公は冷静に見つめる。それは、主人公自身、「私もそうだった」という深い反省があったからである。「中学の頃、大好きだった祖母を看取った。受験勉強を理由に、見舞いにはめったに行かなかった」と猛烈に後悔した。だからこそ、終末期の患者さんと向き合う心構えができたのではないかと読み取れる。

死者に対する作者の人的対応と深い洞察が光る本作品は、終末期医療の様々な問題を提示し、読者に考えさせる内容ともなっている。

【エッセイ部門の選評】

「愛猿記賞」大賞 こんどう 近藤 さむらい ゆみ子 「侍」

婚家を飛び出し、赤ん坊だった作者を抱きかかえて働く26歳の母。その母が働くスナック『侍』には、壁全面のモノクロの巨大なパネル写真が見る者を圧倒した。三船敏郎が演じる椿三十郎が、日本刀を逆手に構え、こちらを睨みつけている。その猛々しい侍の姿は、小学校に上がる前の作者の目に強く焼きつ

いた。

大胆で負けん気の強い母は、作者を一人前に育て上げた。

その後、作者は結婚し、娘が授かった。孫の姿に、作者が重なったのだろう。ある日、母が言った。「昔はがむしゃらに仕事ばかりしていたけれど、もっと一緒にいてあげれば良かった。小さい時から一人で寂しい思いばかりさせて、あんたには大きな借りを作ってしまったね」

初めて聞いた、詫びの言葉。母こそ女を捨てて再婚もせず、子育てという戦いを終えたのだ。「独りで育て上げる」と言った母に、二言はなかった。子供のころに見た『侍』の椿三十郎が、臉に浮かんだ。今年、母は八十歳、作者が仕事から戻ると、童女のように、その日の出来事を喋り出す。

選考委員から、「シングルマザーでの子育てが、現在より大変だった昭和を生き抜いた女性、そんな彼女に孫ができ童女のようになっていく姿。よかったねと声をかけてあげたい」「文章にソツがなく、読ませる。目配りが行き届いている」という評価であった。無駄のない文章で、心象風景の映像化と母子成長の時間プロットを巧みに使った素晴らしいエッセイである。

「愛猿記賞」佳作 ひらの 平野 ゆきこ 由希子 まめ 「豆まき」

「豆まき」は、作者の祖父の話である。昔からの習わしを大切にする祖父は、季節の行事などを人任せにせず全部自分でやる。節分の豆まきも、威厳を以て自ら率先して「鬼は外。福は内」と言いながらお菓子をまく。

作者もやがて親となり、祖父に倣い、節分の日に「鬼は外。福は内」と豆まきをやるようになったが、下の息子が小学校高学年になり自然消滅してしまった。

「歳月とともに記憶は日々色褪せていくが、座敷に仁王立ちになり、ぶ

っきらぼうな口調で、『鬼は外。福は内』と言いながらお菓子をまいていた祖父の姿は、いまでも鮮明に心に焼きついている。」と結んでいる。

選考委員からは、「作者の祖父のようなおじいさん、最近は見かけない。正月も平日のように過ごす家も多いという。エッセイで時代を残していくしかないのかもしれない」と。他の委員からも、「場面、場面の様子が映像となって立ち上がり、とても読みやすかった。自分が親となつてからの豆まきとの対比も効いている。でも一番は、お祖父さん自体がこのエッセイの魅力なのかもしれない。気難しくて子どもには近寄りたいたいところがあり、昔からの習わしを家長の務めとしてやっていたお祖父さんが、子どもたちを集め、座敷に仁王立ちになつてぶっきらぼうな口調で『鬼は外、福は内』と言いながら、飴玉や金平糖や落花生をまいている光景は、厳かな中に滑稽さがあり、とても魅力的。でも、それを見出して取り上げるのが、書き手の感性、力なのかもしれない」との評価が寄せられた。

「愛猿記賞」佳作　　^{おの}小野　^{こんぼうし}みふ「紺帽子いっせいに」

「紺帽子いっせいに」は、子供が幼稚園・保育園に通園するとこの家庭でも見られる「あるある日常」。そのどこでも見られる日常の一コマを切り取り、巧みな筆運びで表現するのもエッセイの魅力である。

作者は、通園する娘の様子を「家からたった百メートルほどの距離でも、入園したての娘にとっては、ぬかるんだ泥道のように違ったに違いない」「繋ぐ手に、ぎゅっと力が入る。みんながバスに乗ったあと、ぽつんと突っ立ったまま」と描き、親の心配を平易な視覚的言葉で表情豊かに表現している。

そんな母親の心配も夏休みが明けて氷解する。「ママ、はやくうー。バス

来ちゃうよー」と数ヶ月前とは大違い。友達ができ、笑顔が増えて、バス停までの行き来もスムーズになっていく情景が読み手に伝わってくる。

躍動し成長する娘と、安堵する母。母娘の手応えのある日常の歩みと、その息づかい。愛に満ちた親子の関係を、文章作りのセオリーをしっかりと押さえながら、記号の使い方にも工夫を凝らし、何気ない日常の一コマを平易な文章で切り取り取った、心温まるエッセイである。